

実践報告

ボールパークの街

—北広島市の福祉・保育・教育の未来を展望する—

上 原 正 希

北広島市・星槎道都大学連携企画・特別講座（社会福祉学部開学 45 周年）

テーマ ボールパークの街—北広島市の福祉・保育・教育の未来を展望する—

会 場 北広島市芸術文化ホール（大ホール）



●開会の挨拶 飯浜浩幸 北海道星槎学園理事長・星槎道都大学学長



皆さま、こんばんは。本日はありがとうございます

ます。このように多くの方のご参加をいただきまして、心より感謝を申し上げます。ただ今ご紹介をいただきました学園の理事長、そして大学の学長を務めております飯浜と申します。日ごろより本学、私どもの学生、教職員、そして卒業生を応援いただき、またお力添えを賜り、そして支えていただいておりますことに、この場をお借りいたしまして心より感謝を申し上げます。今回、市との連携講座の2回目ということで開催をさせていただきます。

今年度、おかげさまで本学は開学 45 周年を迎えました。学園といたしましては、この北広島市の地で、ちょうど野球場のあるところ、あそこがスタートになっておりまして、短大からスタートいたしまして来年で創立 60 周年となります。大学は流水の街紋別市で、全国で 6 番目の社会福祉学部、それから全国で 7 番目の美術学部という、その当時大変珍しい学部学科構成でスタートをいたしました。2005 年に、この北広島市のキャンパスに全てが統合されまして今日に至っております。北広島市との包括連携協定を締結したのが 2013 年であります。それから 10 年の歩みとなります。その間に市、そして市民の皆さま、そして企業の皆さま、そういった皆さまからのお力添えいただきながら、皆さまと一緒に学生を育ててきました。本学の活動に皆さまがご参加下さり、本学の学生たちがみなさまの活動にさまざまな形で参加をさせていただくことにより、この街の発展に寄与させていただいている、そんな形の関係を 10 年かかりまして、つくり上げることができまし

た。これもひとえに市民の皆さまからご理解をいただき支えていただいた賜物と、重ねて感謝を申し上げます。

野球といえば、本学の硬式野球部、昨日リーグ優勝をいたしました。この野球の街、ボールパークの街北広島市から全国大会へ行きます。6月5日夕方ですが、東京ドームで大阪商業大学、非常に強い大学と聞いております。その強豪校と対戦いたします。引き続き応援いただきますよう、お願い申し上げます。

この後、私どもの教育研究活動の成果であり、それから卒業生、この街、北広島市で就職いたしまして、皆さまに育てていただきながら活躍しております卒業生を迎えるのシンポジウムでもございます。私ども地域をキャンパスとして、学生成長率ナンバーワンの大学を今、目指しているところでございます。引き続き私どもに対してのご理解、ご協力、そしてお力添えを賜ればと願います。それでは本日のプログラム、どうぞよろしくお願いいたします。

●第1部 ボールパークの街 北広島市の
福祉・保育・教育の現在と未来
—北広島市で学び・働く卒業生の視点から—

発言者 高谷 里奈 北広島市みなみ
高齢者支援センター

発言者 原 裕紀 児童養護施設
北光社ふくじゅ園

コーディネーター 小早川俊哉 星槎道都大学
副学長・社会福祉学部学部長

【小早川】

皆さん、こんばんは。それではこれから第一部を始めさせていただきます。座ってこれからお話しさせていただきます。ここにいるお二人の卒業生なんですけれども、本学を卒業して北広島市で今、仕事をしています。もしかしたら、ここにいる学生さんも、実習に行くと、このお二人の方に



実習指導を受ける可能性もありますので、そういった点でも顔をよく覚えておいていただければと思います。それではまずお一人ずつに、なぜ北広島市にあるこの星槎道都大学に入学をして、また卒業しても北広島市で活躍をされているのか、またどういう仕事をしているのか、そういったことをお話ししていただこうと思います。まずは高谷さんからお願いできますでしょうか。



【高谷】

皆さん、こんばんは。よろしくお話しさせていただきます。私は星槎道都大学を2018年に卒業しました。社会福祉学部の当時の福祉心理専攻という学科を卒業しております高谷と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

それで私が北広島にいます星槎道都大学を選んだ理由ですが、もともと福祉の業界に興味を持ったきっかけとなりますと、曾祖母が若年性のアルツハイマー型認知症でした。幼少期、ちょうど私が幼稚園ぐらいのときですが、ずっと祖母の

ほうが在宅介護で大変な様子を間近で見せておりまして、将来、何か人の役に立つ仕事がしたいとずっと思っていました。それで福祉を目指すというところで大学をいろいろと見て、もともとはA大学のほうに受験しようと思っていたのですが、道都大学にも社会福祉学部があるという話を父から聞きまして、選定にあたり、一度見学に行っています。

見学に行ったときにA大学と違って、少人数制で、地域に根ざした学びができるというところと先生方との距離が近いという点で、星槎道都大学のほうが私の学びのスタイルに合っているというところで大学を選んで就職しています。

北広島でどんな方々を対象に仕事をしているかといいますと、北広島市みなみ高齢者支援センターというところで勤務しています。札幌市だと、地域包括支援センターという名称で同じような機関があります。私が勤めている担当エリアは北広島団地地区という地区と、駅の近くの北進町、栄町、山手町までの14地区を担当圏域としています。主に65歳以上の方々や、40歳から64歳で、末期がんや特殊な疾患がある方々の総合相談窓口となっており、専門職が主任介護支援専門員と社会福祉士と保健師などの専門職がその方々の困りごとに応じて対応しております。

主に介護保険の申請の仕方をどうするのかとか、ご家族が認知症で対応に困っていて相談したいという多岐にわたる相談がご本人、ご家族さん、それから地域に住む知人の方々、地区に担当している民生委員などから相談がありますので、ご家庭を訪問し、対応したり、病院から退院するときに相談が来る場合もありますので、そういった相談に日々のっている機関になります。

私は今、社会福祉士と精神保健福祉士の資格を持っているんですが、現在、メインで使用しているのは社会福祉士の資格になっています。その知識をいかしながら、介護予防などの仕事もしており、現在65名ほどのお客さんを担当させていただいております。その方々のケアマネジメントや、日々の生活に支障がないかだとか、現在ご利用

しているサービスで、何かほかに追加したほうがいいことがないか、ご家族さんで困っていることがないかなどを、日々、訪問だとか、お電話だとかさせていただいて調整する仕事をしています。

【小早川】

どうもありがとうございます。北広島市は現在、30数%の高齢化率ということですが、現在、高谷さんが働いている団地地区は高齢化率が40%後半ということで、いろいろと相談件数が増えているということがわかりました。

今度は少子化のほうに関係をしてくる児童分野で現在働いている原さんです。

それでは、お話をさせていただきたいと思います。よろしくお祈いします。



【原】

皆さん、こんばんは。私は2019年度に星槎道都大学を卒業しました原裕紀と申します。本日はよろしくお願いいたします。この大学を選んだ理由としましては、私は、幼少期から柔道をしておりまして、柔道が強いということに魅力を感じ、また、今後の自分のことを考えたときに、何か資格をとって人の役に立ちたいという思いもあったので、保育士の資格取得も目指して、この大学を選びました。

現在は北広島市にある西の里にあります児童養護施設で児童指導員をしております。児童養護施設というのは、さまざまな理由で保護者と離れて

暮らさなければいけない子どもたちを対象に、生活支援や、自立に向けて支援をしていく施設です。入所している子どもの主な理由としては、保護者からの虐待、保護者の貧困、病気で養育が困難になっているなどの理由など、理由も多様化しています。

私自身は児童指導員として生活援助に入っているのですが、皆さんのお父さんやお母さんがしてくれている一般的な家事であったりとか、学校と児童相談所と保護者さんとの連絡の調整であったりの業務をしています。また、私はスポーツが得意でありましたので施設からスポーツ指導のほうの役目もいただいております。保育の知識にプラスしてスポーツの経験を生かした子供たちの体力づくりを主な仕事としています。

【小早川】

ありがとうございます。原さんですけども、学生時代、うちの柔道の体重別個人で全道2位になり、決勝では、肩を脱臼して棄権したそうです。本当だったら優勝できたというところですね。ですので文武両道といいますか、しっかりと勉強しながら柔道もやって卒業して、その資格を生かして今は児童の分野で活躍をされているという形です。

お二人とも、原さんは今言ったように柔道部でしたけれども、高谷さんのほうはオープンキャンパスのスタッフですとか大学のいろいろな催し物で、いろいろと貢献をしてくださった方です。それでは時間も短いのですので、北広島市にボールパークができましたが、ボールパークができたことによって仕事で対応をしている高齢者の方、あるいは児童の方でどんなふうに変わっていくか、そして何か問題点もあるようでしたら、こうしたほうが良いんじゃないのかっていうような提案をいただければと思います。

【高谷】

では私のほうから失礼いたします。現在、私が勤めている北広島団地地区は高齢化率がとても進

んでおりまして40パーセント台後半で、大体2人に1人が高齢者という時代になっております。空き家も増えて、やっぱり歩いている方々は皆さん高齢者で、逆に歩いている方が全く見えないというのがコロナ禍において加速しております、町全体が静かな町になってしまったというところなんです。ボールパークができて、結構若い方が空き家を更地にして新しい家を建てて住んだりだとか、もともと建っている家を直してお子さん連れて若い家族さんが住んだりとかして、町全体に活気が出ているかなというところで、もっとこれから若い方々が増えてくると、やっぱり高齢者の方々は子どもの声が聞こえたりだとか若い方の姿を見ると、自分たちも元気をもらえるというところで、もっと担当している方々が元気で過ごしてもらえる町になればというところで期待しております。

一方でコロナ禍になってから、皆さん今までできていたサークル活動に出席できなくなったりとか会館が閉鎖し、ボランティア活動ができなくなったりということで自宅に閉じこもりがちになっておりまして、筋力、足腰の低下だとか、サービスを結構使う方が増えています。ボールパークができたところで、北広島にもう長年住んでいる方が多いので、やはりこの建物に一度は行ってみたいという方がかなり私の担当のお客さんだとか、地域の方々の声から増えております。近くに住んでいる方だと自分の足で歩いて散歩も兼ねて一度は見てみたいという方も結構増えております。今まではサービスに依存していた人も、そういう目標、自分の足でボールパークまで歩いて行けるようになりたいだとか、バスを使ってでも一度は見てみたいという目標があると、皆さんそれに向かってリハビリが今までよりも頑張れたりするのではないかなと思っていて、良い方向に進んでくれるんじゃないかというところで期待しております。

あと団地地区は、お店の数が限られておりまして、足腰が丈夫な方とか車の免許を持っている方は良いんですけども、大体皆さん80後半、90

代の方が多いので、免許を返納してしまって足がないだとか、バスをご利用されている方が多いんです。ボールパークができてからバス時間の改定がありまして、駅から団地地区に向かうバスのほうは増便したんですけれども、逆に団地地区のほうから駅へ向かうバスのほうが少なくなってしまったというところで、今まで止まっていた停留所だとかにバスが止まらなくなってしまって、買い物は毎回タクシーを使わざるを得ない方々の声だとかも聞いておりますので、若い方も住みよく高齢者でも住みよく、全体がよりよく住みやすい街にするために、もうちょっとバスなどが整うと、全体としてもうちょっと暮らしやすい街になるんじゃないかというところで意見とさせていただきます。

【小早川】

ありがとうございます。現場で働いていて、その地域がどんな感じになっているのかについてお話をいただきました。やっぱりもう少し交通の便がよくなったらもっとよくなるのという意見でもありました。この辺のところを皆さんもいろいろ考えていただいて、何か対処法ができればというふうに思います。

それでは原さん、児童のほうで同じような質問でお答えください。

【原】

ボールパークができてからの児童の生活を見てもみますと、子どもたちの遊びの主流がゲームだったんですけど、そこからボールパークができたことによって外に遊びに行ったりだとか公園に行ったりっていうのが増えたイメージがあります。それで休みの日に公園に野球をしに行くことだったり、休みの日にテレビ中継で野球の応援をするというような目標というか活力につながっているのではないかと感じています。それで小学校は授業の一環でボールパークの見学のほうをしていたと思うんですが、ボールパークを実際に見てこの舞台に立ってみたいだったりとか、ここで試合を見

てみたいっていうふうな目標にもつながっていると思います。そこでなんですけど、子どもたちでどうしても試合を見に行くとなった場合、ボールパークは完全キャッシュレス化をしていると思うんですけど、キャッシュレスでの支払いは大人側は不安かなって思う点がいくつかありまして、やっぱり子どもにクレジットカードだったりすると、お金が減っていく感覚がどうしても身に付かないのかなっていうふうな懸念はあります。試合観戦の流れでもう一つお話ししたいのが、試合観戦をしにくる人は、道外からも行き来することが考えられるので、人も増え、街の治安が心配です。

【小早川】

西の里地区は少し夜に街灯が少ないので、人が増えるというところで子どもに対しての不安が大きいのかなと思います。それで市民同士での見回りの強化だったり、地域の人たち同士が密になって見回りしていくなど、地域の人たちの目があるだけで、その不安要素だったりというのは減少させていけるのかなと思います。

今、お二人からお話があったところ、やはりボールパークができたことによって児童のほうも高齢者の方も目標というものが少し新しいことができたということで、やはりいろいろと良い面はあるんですけど、不安な部分も多少あるということかと思えます。高谷さん、原さん両方の方がおっしゃっていたのは、やはり地域で見守りであったり地域の方の支えであったり、そういったところで非常に重要なんじゃないかということ、それができるようになれば北広島市が、もっと住みよい街になるんだらうということでもよろしいですかね。

それでは時間になりましたので、これで一部の方を終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

●第2部 ボールパークの街 北広島市の
福祉・保育・教育の現在と未来
—専門家の視点から—

【小早川】

これから第二部のほうに移らせていただきます。今、卒業しました卒業生の話も踏まえた上で、今度は本学の教師、教授陣にそれぞれのご専門分野におきましてのボールパークができたことによって教育、それから保育、福祉という部分でどのような変化があったかというようなことを中心に専門的な視野からお話をさせていただこうと思います。それではまずは本学の、私の左側から西崎先生です。教育分野で教職課程のほうを専門に本学において教授されている先生です。それとのお隣が吉江先生。特に本学におきましては保育コースを担当していただいて学生を鍛えていただいております。さらに一番左側になりますけれども畠山先生。ソーシャルワーク、社会福祉士、精神保健福祉士を中心に学生にいろいろと指導していただいている先生であります。それではまず西崎先生からでよろしいですね。教育分野からという視点で北広島市のボールパークができてどのように変化していくか、あるいは今後どのようにしたいかといったことを中心にお話をさせていただこうと思います。ではよろしくお願いいたします。

○テーマ ボールパークの街 北広島市の教育の
現在と未来

発言者 西崎 毅 星槎道都大学 特任教
授・教職センター所長

ご紹介いただきました教職センターの西崎です。私のほうからは、教育というキーワードを中心にお話をさせていただきます。

まず、本学教職課程と北広島市の関係ということですが、北広島市には大変お世話になっておりまして、教職課程で学ぶ学生が体験活動を行うさまざまな機会を提供していただいております。



す。教職に係る各種ボランティア活動をはじめ、教育実習や学校体験活動など、必要に応じてご対応いただけることになっています。逆に本学から北広島市へのご協力ということでは、2枚目のスライドになりますけれども、本学の教員が本市の社会教育委員や各種審議会の委員をお引き受けしているということがあります。大学が有する専門的知見の提供ということでもあります。私も市立学校適正配置等審議会というところの委員を務めさせていただいております。

それでは視点を「北広島市の教育」に移したいと思えます。スライドにありますように、今、現在、北広島市といえば、「ボールパークの招致」と「先進的な教育の導入」の二つが挙げられるかなと思います。ご承知のとおり、北広島市では、「希望都市」、「交流都市」、「成長都市」、また、「懐く」、「励む」、「挑む」という、理想とする「都市像」と「人材像」が掲げられておりますが。「ボールパークの招致」や「先進的な教育の導入」は、まさにこうした基本的な考えが具現化されたものと受け止めています。私なりの理解ということでお話をさせていただきたいと思えますが、北広島市は、道内でも大変先進的な教育を推進している自治体です。その特徴の一つは、「コミュニティ・スクールの導入」で、もう一つが「小中一貫教育の導入」です。そして、三つ目が、近年、大変重要性を増している「ICT機器を有効活用した授業づくり」です。北広島市においてはこれらを全ての小中学校で実現をしているところであり、全国的にも大変注目を集めるものと考えております。

それではまず、「コミュニティ・スクール」について見ていきたいと思います。ご承知のとおり、「コミュニティ・スクール」というのは、中学校区にある小中学校を、地域が一体となって支援をするというシステムです。現在、小中、高等学校において新しい学習指導要領が進められておりますけれど、キーワードは「社会に開かれた教育課程の実現」です。「コミュニティ・スクール」は、こういった「社会に開かれた教育課程」を実現する上で大変有益なシステムであると言えます。スライドの「コミュニティ・スクール」のイメージ図ですが、緑陽中学校区にお願いをして載せさせていただきました。緑陽中学校区の小中学校をそれぞれ、地域の人材であるとか、あるいは関係機関、団体が一体となって支援するというシステムです。具体的には次のスライドにありますけれども、町内会、文化協会、児童センターなどのさまざまな機関、団体、人材が、右側に掲げたようなさまざまな支援活動を行っているということであり、北広島市は「コミュニティ・スクール」の歴史が大変古く、平成25年度に、すでに西部中学校区に設置ということで、これは全道で2番目という早さです。これについては、本学の小早川学部長も深く関わっていると伺っています。令和2年度にはこの「コミュニティ・スクール」を三つの中学校区に拡大し、本年度は、全中学校区に設置の運びとなっているとのことであります。大変素晴らしい取り組みであると感じております。そしてさらには、すべての小中学校が、このあとふれます「小中一貫教育」を導入しており、全道的にも本当に珍しい自治体だと言えるかと思いません。

次に、「小中一貫教育」について見ていきたいと思えます。「小中一貫教育」については、北広島市は道内の自治体でもパイオニア的な存在です。平成30年度から全中学校区で実施ということで、道内の同規模の市ではほかに類はありません。例えば、江別市は令和4年度、1校、名寄市は令和3年度、2校です。平成30年度にすでに7校で実施している北広島市はいかに先進的な自治体であ

るかということがお分かりになるかと思えます。そして先ほども説明しましたように、これらすべての学校が「コミュニティ・スクール」のシステムを導入しているということでもあります。さらに、私が委員を務めさせていただいております北広島市立学校適正配置審議会においては、「小中一貫教育」をさらに進めた9年間を修業年限とする「義務教育学校」の設置についても検討がなされているところです。今日は、教職課程の学生もおりますので、「小中一貫教育」の利点についていくつか紹介をさせていただきたいと思えます。「小中一貫教育」においては、何といても9年間を見通した一貫した指導計画の下で子どもたちを指導できるという利点があります。例えば、小学校から中学校の9年間にわたって「授業スタイル」や「板書方法」や「ノート指導」を統一することによって小学生が中学校に上がったときに違和感なく安心して学習を進めることができます。また、中学校1年において急に不登校の子どもが増えるなどといった、いわゆる「中1ギャップ」問題を解消することができます。また、中学校区において9年間統一した学習面や生活面の目標をその中学校区の「スタンダード」として設定することにより、子どもたちは9年間一貫して安心した学校生活を送ることができます。また、小中学校の教員が相互に乗り入れをすることができます。つまり、小学校の先生が中学校に教えに行ったり、あるいは中学校の先生が小学校に教えに行ったり、そういうことが可能になるわけです。今、小学校においては、高学年を中心に教科担任制の導入というのが少しずつ進んでいますが、「小中一貫教育」の下では、例えば中学校の英語や体育や美術の先生が小学校に行って授業をすることができます。また、キャリア教育についても9年間一貫して継続することができます。北広島市で使用している「きたひろ夢ノート」は、その具体例です。また、9年に及ぶ異年齢集団を構成することができます。通常、小学校では6年、中学校では3年の異年齢集団になりますが、「小中一貫教育」を実施することで9年異年齢集団の中でさまざま

な活動を行うことができます。以上述べたように、「小中一貫教育」は非常に評価できるシステムです。そして、それを全ての小中学校で実現されている北広島市の教育は大変先進的であるということが出来ます。

それでは三つ目の「ICT 機器を有効活用した授業づくり」についてみていきたいと思います。国の GIGA スクール構想の下、北広島市の学校においても全ての子どもたちに学習者用 PC が設置されたということでもあります。そして授業においてはそういった ICT 機器が有効に活用されているということです。文部科学省の「全国学力・学習状況調査」の結果を見ましても、北広島市では、子どもたちが「これまで授業で PC やタブレットなどの ICT 機器をどの程度使用しましたか」、「PC やタブレットなどの ICT 機器をほかの児童生徒と意見交換をしたり調べたりするためにどの程度使用しましたか」、また、学校が「授業においてプロジェクターや電子黒板をどの程度使用したか」という質問項目において、全国平均をはるかに上回る成果が報告されております。

これまで見てまいりましたように、北広島市におかれましては、「コミュニティ・スクール」の導入、「小中一貫教育の導入」、さらには「ICT 機器を活用した授業改善」というように、非常に先進的な教育環境を整備されております。星槎道都大学はこうした理想的な教育環境が確立されている都市に存しておりますので、教職課程教育を進める中でも、参考にさせていただく点が多々あり、大変心強い思いをしているところであります。

最後に、こうした充実した教育環境の整備が北広島市の今後にとってどのような成果をもたらすのか、私なりにシミュレーションしてみました。最後の図をご覧くださいいただければと思います。①ボールパークを招致しました。②全国で北広島市への関心が高まっています。③一方で産業が発展し、経済も一層振興します。④そんな中でぜひ「北広島に住んでみたい」とか、あるいは、⑤「北広島市で子育てをしてみたい」と、こういった方々がおそらく増えてくるのではないかと思います。そ

こで、⑥北広島市に移住を検討する中でやはり一番重要なファクターとなるのは「教育環境がどうか」ということだと思います。特に若い世代の世帯にとっては「うちの子どもにどんな教育が提供されるだろうか」、そこが一番大きな関心事ではないかというふうに思います。本日、これまで説明をしてきましたように、⑦北広島市においては大変先進的な教育環境の整備を進められて、子どもたちの健全育成が図られている。そうしたことから、⑧おそらくは居住を検討する方々の中から多くの居住が実現し、それが人口増加につながり、北広島市の一層の発展につながっていくものと、そういうふうに考えているところであります。

こうした先進的で充実した教育環境づくりをこれまで進めてこられた北広島市の上野市長、吉田教育長様をはじめ、そうした行政施策をお認めいただいた市議会の皆さまに心から敬意を表しまして私の発表を終わらせていただきたいと思います。以上でございます。

○テーマ ボールパークの街 北広島市の福祉・保育・教育の現在と未来
保育の視点から

発言者 吉江 幸子 星槎道都大学 教授



こんばんは。きょうは学生さんも参加して下さってありがとうございます。さらには保育園の園長先生ですとか、議会の方、さらには公開講座などで交流をさせていただいている一般市民の方々もおいでいただいております。本当に本日は

ありがとうございます。それではこの後座って説明をさせていただきます。今、西崎先生のほうから教育に関してのお話がありました。

教育、小学校、中学校、毎日学校に通っています。でもその子どもたちが戻ってくるころはどこでしょう。家庭です。その家庭という場所で子育てをしていく保護者の方々がいます。子育てというふうに私たちは言うんですけども、教育の分野から家に帰ってきて、「ただいま」、「おかえり」、「今日も行ってきます」、「行ってらっしゃい」、そういうふうに声をかけていくのが家庭という場所です。実は先ほど児童養護施設で働いている卒業生の原裕紀さんが話をしてくれましたが、児童養護施設という場所も一つの家です。ですから児童養護施設で生活している子どもたちは「ただいま」というふうに帰ってきて、次の日に「行ってきます」というふうに学校に行っています。

そんな原さんの話で、実は一つ原さんが言い忘れたことがあって、後ろで待機しているので、子育てに関する話を、少しだけ話を聞いていただけますか。お願いいたします。

【原】

私が働いている児童養護施設は、子育ての観点からの地域の住民の方々の相談支援を受けるのも児童養護施設の役割の一つとなっております。その観点でやはり先ほど話していたと通り、人が増えることによって、ここで暮らしていきたい、家庭を持ちたい、子育てをしたいという風な人たちが増えてくると思います。そこでやはり家庭が増えることで、それぞれの家庭の悩みだったり子育ての悩みだったりというのは家庭がある分だけ悩みがあると思います。よって、児童養護施設としましては、その悩みに寄り添っていけるような形の体制をとっていかなければいけないのかなということを、先ほど話したいと思っていました。話す機会をいただいて吉江先生、ありがとうございました。

【吉江】

お時間ちょうだいしてありがとうございます。今、話をしてくれた原裕紀さんは実は私のゼミ生でして、在学中から4年間ずっといろんな保育園に実習とは別に顔を出して遊びに行ったり、高齢者施設の方々と関わったりして、本当にボランティアをたくさんしてきました。青森出身で両親は「青森に帰っておいで」というような話もありながら、北広島でたくさん関わってきたので、ここで就職したいということでこの北広島で今こうやって生活をしている卒業生の一人になります。卒業生が活躍をしてくれるというのは、私たち大学の教員にとっても大変うれしいことです。この北広島という場所にあるこの星槎道都大学はやっぱり札幌近郊から通ってくる子もいますし、北広島以外のところから通ってくる子も多いので、そうなってくると地元に戻るといってしまう卒業生の方が多くなります。ですが、この街がこうやって発展し、成長し、そして希望に満ちあふれていく街になっていけばいくほど、魅力あふれる場所になりますので、そういう意味では学生さんたちも、ここが自分たちのこれから生きていく場所だと思ってもらえるのかなと思っています。それではスライドに沿って説明をさせていただきます。

保育の視点から本日は4つのお話をさせていただこうと思って資料を準備いたしました。今この画面にあるバックの写真なんですけれども、実はコロナになる前は大学に保育園の子どもたちを呼んで一緒に学生と遊んだり、あるいは学生が保育園に行くと子どもたちと一緒に関わったりということをやっていたので、コロナになってからはなかなかそれができなくなってしまっているんですけれども、今、また2類から5類になったところで、どこかと交流できたらいいなと思ってこの写真を入れさせていただいております。

本日は保育士としての活躍の場、それから本学における保育士の養成、そして卒業生の動向と北広島市との連携と、今後ということをお話をさせていただきます。すでにご存じの方もいらっしゃる

と思うんですけれども、保育士として活躍する場所や、保育士の学びを生かす場所はどんなところなのかということを紹介したいと思います。

皆さんたちの頭の中には保育士といえば保育園、認定こども園というところが就職先だろうと思っていらっしゃる方が多いかもしれないんですけれども、実は保育士という資格は児童福祉法という法律に定められているので、児童福祉、つまり福祉の中の一つということなんです。保育士の名称で働く場合には、各都道府県に保育士登録をするということになりました。これは平成15年からです。

私は昭和の時代に保育士の資格をとっておりましたので、そのころは保母資格というふうに言っておりました。保母のときは学校を卒業したらそのまま登録をせず働くことができましたが、平成15年からは登録をしてくださいと、突然郵便物が舞い込んできました。勉強不足だった私はそのことがよく分からなくて、登録？何のこと？これはどうしたらいいのっていうことで、道庁に問い合わせをしながら、ああ登録、法律が変わったんだってということが後々になって分かったような状態です。ですから今でも保育の養成校を卒業された方で、登録をしていない、つまり保母としては卒業しているんだけど、登録をしてないという方も中にはいらっしゃいます。でも今からでも登録をすることはもちろんできますので、ぜひ自分が保母という資格を持ってらっしゃったら登録をされると仕事ができると思います。現在の登録者数としては167万人。この中に私も含まれますし、本日おいでいただいている保育園、認定こども園の園長先生方も、もちろんこの中に含まれるお一人になるかと思えます。

保育所というのは児童福祉施設というふうに申し上げましたけれども、児童福祉施設の中でも保育所は保育士として職員を置かなければいけないという必須条件があります。それは保育所はもちろんなんですが、それ以外にも原さんが働いている児童養護施設、障害児の入所施設、児童発達支

援センターなどいくつかの種類のところでは保育士という資格を持って働かなければいけないという場所があります。ちなみに北広島市内、児童福祉施設ということで今、画面で紹介をさせていただいておりますが、保育所という場所は、この北広島市内には15か所あります。これは北広島市のホームページの中で紹介をされていて、今、ホームページの中では、今年新しくFビレッジに一つ誕生しましたという情報ですとか、あるいはどここの保育所が定員いっぱいでは何歳が今なら空いているという情報が書かれたものがホームページの中に入っています。それから北広島市のこれは一つの特徴かなと、私は思っているんですけれども、児童養護施設、北海道内には23か所しかありませんが、そのうちの2か所がこの北広島市内にあります。それが天使の園と北光社ふくじゅ園になります。また3番目に書かれていますが、児童自立支援施設とって北海道立向陽学院という施設が北広島市内に1か所ございます。これは北海道では3か所しかありません。全国でも58から9か所というふうにはホームページではなっているかと思うんですけれども、その数少ない児童自立支援施設というところが北広島に1か所あります。そういったところで保育士という資格を持って保育所以外でも活躍の場があるということ、一つご紹介をさせていただきます。

では星槎道都大学における保育士養成ということなんですけれども、全国的に見て、あるいは北海道で一体どれぐらいの数があるんだろうということ調べてものを今、画面に出しています。令和4年4月現在の数字なんですけれども、北海道内には大学4年間で保育士を養成しているところが7か所、短期大学で11か所、専門学校で8か所という形で養成をしております。全国的に見ると、大学が232で短大や専門学校を上回っているということがグラフを見てお分かりになるかと思えます。星槎道都大学は社会福祉学部の中で保育士養成をスタートいたしました。先ほど飯浜学長がお話をされておりましたが、昭和60年に保育士の養成課程がスタートしております。社会福祉

学学士という社会福祉分野の学問をおさめたという保育士ということになります。またちょっと一点、宣伝にはなりませんけれども、通信教育課程によって保育士の資格を3年間でとっていくというそういう通信教育課程があります。これは通信教育を始めて8年目になるんですけども、北海道で通信教育で養成しているところは本学しかありません。本日も通信教育で勉強されている受講生の方々が会場にお越しくださっています。ありがとうございます。働きながら保育士の資格をとるために大学に来て、友達というか受講生と一緒に顔を合わせながら勉強を進めているというところなんです。そういった方々がこの北広島にもたくさんいらっしゃるし、北海道一円から通信教育という形で勉強されている方が数多くいらっしゃいます。配布資料のQRコードに、通信教育がどんな感じなのか見ていただけるといいと思います。また保育士だけではなく社会福祉士や精神保健福祉士などの国家資格もとっていき通信教育がございます。卒業生の動向として過去5年間、保育士の資格をとった者がどんなところに就職をしているのかということグラフ化しました。社会福祉学科は定員が60名です。その中で保育士の資格を持つと勉強している学生さんたちは大体2割程度になります。ですから10数人という形でこじんまりとした形の保育士養成になります。北広島市内には、先ほど保育園が15か所あると申し上げましたが、その中で実習でつながっているところもあります。求人でご連絡をいただくところもありますが、なかなか卒業生を送り出すことができていないという苦しい現状ではあるんですけども、今、この北広島市内が人口が増えて子育てされて、その子どもたちが大きくなって、そして星槎道都大学の保育士養成というところに入ってくれたら、その子どもたちが就職ということで地元で活躍をしてくれるのではないかと感じているところです。このグラフを見てお分かりかと思うんですけども、本学の保育士資格をとった卒業生の方々というのは、どちらかというと保育園というよりは保育所以外の児童福祉施設で就職し

ているということが分かります。これはやはり社会福祉学部で勉強しているというところが大きい理由なのかなとも思っています。4年間の中でソーシャルワークの技術を身に付けて、そして、その技術を生かして保育所で働くということももちろんできるのですが、その技術を生かして高齢者施設、障害者施設、あるいは児童養護施設であったり、福祉施設で働いているという卒業生が多いというのが今のところの実態ということです。次は最後のほうになりますけれども、北広島市との連携と今後ということでいくつかご紹介したいと思います。

実は市役所の方で、音楽が大好きな方が2人ほどいらっしゃいます。もっとたくさんいるのかもしれないんですけども、私が存じ上げている方に2人いらっしゃいまして、作詞が熊谷さん、作曲・編曲が小玉さんということでお名前を入れさせていただいております。お二人には了解を得ているんですけども、この2人が北広島市の職員ということで。小玉さんは今年の4月から大曲の消防署の署長さんです。このお二人がいろんな音楽づくりをしてくれています。そんな中で令和元年に「さんばまちの唄」という歌ができ上がって、それをもとにして学生に声をかけて、私のゼミの学生で健康体操をみんなで考えない？ということで健康体操をつくり出しました。そしてそれを活用して令和2年、北広島団地地域のサポートセンター、ともにというところで高齢者の皆さんや地域の皆さんに集まっていたいただいて、この健康体操を披露したり、翌年の令和3年は大学の公開講座に参加してくださった方がおり、本日もいらっしゃるんですけども、参加してくださった方々と一緒にYouTubeに動画のせたりしております。「さんばまちの唄 健康体操 2021」ということでインターネット上で検索することができるので、どんな体操なのかというのを見ていただけたらうれしいと思います。それ以外でも北広島市内の保育園と交流をさせていただいたり、先ほどの原さんの写真なんですけれども、在学中に地域連携しているところの保育所にお餅つきのと

ころで子どもたちと一緒に触れ合ったりしていました。その後、何か学生たちでできることがないかということで、「おうちでぬり絵」ということを企画しました。学生の中に絵を描くのが上手な社会福祉学部の学生がいましたので、その子たちに絵を描いてもらって、その絵を原画をたくさんコピーして北広島市内の保育園、幼稚園、子育て支援センターのあいあいさん、近隣の保育園、いろんなところに配って子どもたちに絵を描いてもらいました。その絵を持ち寄って大学の先生方と一緒にコンクールということで、本当は飾っている絵を皆さんたち、子どもさんたちに見てほしかったんですけども、コロナということでなかなか行き来のできない状態でしたが、描いた絵をそれぞれの保育園さんの中で1位、2位というふうに賞を決めさせていただいて、賞状ですとか記念品を持って各保育園のほうに行かせていただいたということが2020年度の交流でした。2022年度には「さんばまちの唄健康体操」ということで公開講座でやらせていただいたものです。ちょうど本日、会場にお見えになっているこの講座に参加してくださった方もいらっしゃっています。今年も6月に「さんばまちの唄」の健康体操と合わせて折り紙の講座を市民の皆さんと楽しみたいと思っていますので、ぜひともお越しいただければと思います。今度は一つ、宣伝になります。令和5年度、学生主体でまた今度は子ども向けの内容ができないだろうかといって、先ほどの熊谷さんと小玉さんに音楽づくりをお願いしました。お手元の資料にあるこのQRコードは音源が入っているものが見ることができます。YouTubeに上がっていますのでぜひこちらほう見ていただければと思うんですが、「ぺんぺんの夢をつかむツバサ」ということでお子さんたちと一緒に踊れるようなそういう健康体操を学生が4人で考えてくれました。新聞の記事になりました。保育の学生の4年生、3年生が歌詞を考えてくれて、その言葉を使って熊谷さんが作詞してくれました。そこに曲をつけてくれたのが小玉さんです。その中には、Fビレッジ行こうよという、問いかけしている歌が

入っています。健康体操はこの後、公開をしていくことになろうかと思っています。本日いらっしゃる保育園の先生方で、うちでやってもいいよとか、うちに来てくれる？とかっていうところがありましたら、ぜひお声がけいただけましたら学生と日程を合わせて訪問させていただきたいと思っています。また、いろいろな高齢者施設の方々も本日おいでいただいておりますので、そういったところで健康体操とか子どもたちが踊っている姿を見たいというようなことがありましたら、お声がけいただけましたら、私たち、是非行って交流をしていきたいと思っています。そういったことが実現できるといいなと思っています。ありがとうございました。

○テーマ 北広島市の福祉の現在と未来—竹内農園の農福連携とSDGs

発言者 畠山 明子 星槎道都大学 准教授



皆さま、こんばんは。遅い時間にありがとうございます。社会福祉学部の畠山と申します。私は社会福祉の立場からということで、すごく重責を担っているような気分になっておりますけれども、お話をさせていただきたいと思っています。よろしく願います。座って失礼します。西崎先生と吉江先生のお話と違って、ちょっと大学の授業チックな話題になってしまっているのですが学生の皆さんはよく聞いている話題も多いかもしれないんですけども、今回、私のほうではこちらのテーマにありますように、普段私は農福連携というこ

とを研究のテーマとして取り組んでいるんですけども、実はここ北広島市にも農福連携に取り組んでいる農家の方がいらっしゃって、その取り組みをこれまで2年ほど取材をさせていただいて研究としてまとめているものがございますので、本日はその事例を使ってお話をさせていただこうと思っています。改めてになりますけれども日ごろより北広島の市民の皆さまには本学の教育、課外活動などにご理解、ご協力をいただきまして改めてお礼を申し上げます。

また先ほどお話をいただきました卒業生の高谷さんや原さんも大学を卒業された後、北広島でお仕事をされておりますように、北広島市には社会福祉の施設も多くありますことから、普段から学生さんもボランティアですとかアルバイトや実習などにおいてもご指導をいただいていることも重ねてお礼を申し上げた上で、次のスライドに移らせていただきたいと思います。こちらの資料にありますように、昨今なぜ社会福祉、福祉ということも日常的に言葉で使われるようになりましたけれども、なぜそれが必要になってきているのかということにつきましてはこちらのスライドにもありますように、高齢者、障害者の方の介護の問題、病気の治療や療養が必要になってお仕事を休職されなければならないという方の問題、子育ての問題もそうですし、それに伴って経済的なサポートが必要だという方、さらには働くための支援や住まいを得る支援、引きこもりや孤立といったさまざまな問題が挙げられているわけですけども。従来は本当に昔のころは家族ですとか近隣の支え合いでこれらを解決していくべきものだというふうにとらえられてきたわけですが、これらの課題というのも社会的に解決が必要だということをとらえられるようになってきてまして、矢印にありますように福祉や医療のサービス、社会保険や公的扶助といったようなさまざまな社会福祉サービスが整えられるようになり、対人援助や所得保障が行われているというところになっています。本学ではその問題の解決のお手伝いをする専門職として社会福祉士、精神保健福祉士の資格を社会福祉

専攻で養成をしておりますけれども、それらの資格を目指す学生さんも多く学ばれている学校になります。私はこれらのいろいろな社会福祉の課題というところの中で、特に最近関心を持って取り組んでいるテーマというのが障害のある方の就労支援を通して地域の課題を解決する農福連携に関心を持っています。図解にもありますように、農業と福祉のコラボレーションという意味合いになりますけれども、農業の従事者も北海道も農業大国と言われていますが担い手が少なくなってきていて、いわゆる耕作放棄地、使われなくなってしまった農地がたくさん出てきていると。農家の方もそれを使うことができなくて困っている。そんな中にお仕事を求めている障害のある方たちが就労支援として取り組んでいこうという取り組みの中から生まれているものです。国としては農林水産省と厚生労働省が取り組んでいるものですが、農林水産省では障害者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画をしていく取り組みと定義づけています。下のほうに図が小さくて恐縮なんですけれども、本学の教育目標とも関わってくるんですがSDGs、日常的にもスーパーですとかコンビニエンスストアでもよくこういう取り組みをうちではやっていますというアイコンをご覧になられた方もいらっしゃるかもしれませんが、農福連携というのもこちらに挙げられておりますような17個の課題のうちのこれらに該当する課題に貢献できると言われていて全国的にも発展をしているところです。歴史的な話になりますと、本当に古いのは1958年ぐらいに栃木県社会福祉法人が始めたもの。あとは今もこれらは続いているんですけども鹿児島県社会福祉法人、白鳩会というところが有名なところで、社会福祉法人なんですけど農事組合法人といういわゆる農家をやるための資格、その資格をとって社会福祉法人がもう大々的に東京ドーム何十個分土地を使ってやっている事例もありますし、2000年ぐらいに入りますと結構民間企業も入ってくるようになってきました。ここに挙げられているようなコクヨさんとかタマホームさんと

かクボタさんというのは、民間企業として皆さんご存じだと思いますが、これらの会社も農福連携ということで取り組んでいます。

さらには、ただものを作るだけじゃなくてそれを加工して販売しているところ、六次産業化という取り組みをされているところも北海道では芽室町、帯広のお隣の町ですけれども九神ファームというところが取り組まれているものも最近出てきていますし、もともとは障害のある方の就労支援だったんですが最近では高齢の方、生活困窮の方、触法者の方などを受け入れるような幅広い取り組みにも広がってきていて、2021年3月現在ですと、全国で大体4117か所取り組んでいるとも言われているほど広がってきています。私が今回ご紹介をさせていただくのが私の勤め先でもある北広島市にある竹内農園というところになります。場所は旧島松駅通のあたりにございますので、国道36号線からちょっと中に入って行くようなところで。2014年から、もともとは全く畑違いの仕事がされていた竹内巧さんが地元北海道の問題に解決していきたいということで就農されて取り組まれています。ただ、この方は農家をしているだけではなくてそういうふうには働き場を求めている方、特に北広島や恵庭市内の障害福祉事業所の利用者の方、つまり障害がある方と職員の方が竹内農園さんにいらしてお仕事をしています。個人の農業では結構珍しいということなんですけど、幅広い品種を育てていて15品目栽培しているということです。私も一度行かせていただいたことがあるんですけども、結構もう、すぐ隣くらいから鹿が出てくるので鹿が入ってこないような電線張っているところを見学させていただいたりもしました。なぜそういうふうにはいっぱい種類を作っているのかというと、いろんな作業を用意しておく、そこにコミットできるような障害がある方が出て来るだろうというところでやられているというお話もありました。仕事が増えたと、障害がある方が受け取ることができる、お給料ではないんですけども工賃というんですが、それが増えるということも竹内さんは

見込んでやられています。ここに挙げておりますように竹内農園さんは社会福祉の分野から来たわけではなくて、奥さまは札幌市内の社会福祉法人で障害者の支援をやられていた方で、ご本人としてはそういう視点がありませんでしたが竹内農園の農福連携の実践からとらえてみますと、地域の課題解決ということではまず北海道の農業を振興していこうということ、それから障害のある方の就労支援ということで貢献していることができますし、障害のある方、それからちょっとコミュニケーション上で大変な方がいらっしゃるんですけど、その方をスタッフとして雇って多様な人材が働く場もつくっていると。一番これが大きいのかなと思うのが、適性を見抜き、それを生かした仕事を提供しているということによって、通常であればこの仕事をやってください、というあるものに合わせて障害の方に担ってもらうというところが多いんですが、竹内農園さんの場合はどういう仕事だったかの方にやってもらえるかということで、専門的な用語で言うとニーズレットという言い方をしますが、その人に合わせた仕事を提供するということが、個人のそういうニーズ、そして地域の課題といったものをつなぐソーシャルワークなんだろうと。全くそういう視点はあまり意識したことがなかったとご本人もおっしゃっていましたが、実際にはそういうところが見られるということで、ぜひ市民の皆さま、そして学生の皆さん、応援いただければと思います。ホームページもありますのでぜひご覧いただければと思います。最後に、私の研究のテーマである農福連携から北広島市はもっともっと発展をしていけると思います。先ほど西崎先生や吉江先生のお話にもありましたように、これから本当にまだ広まっていく可能性が見られると思いますし、農福連携は障害のある方から始まった実践なんですけど、いわゆる北広島市内の方も高齢化が進んでいますが、元気な高齢者の方が多いと思いますし、子育てをするご家族なんかも入ってくるだろうという話もありましたし、我々大学、社会福祉施設も多いですし、プロ野球球団というふう

に書きましたが、ボールパークの中にも先ほど出てきたクボタというところが農業学習施設をつくっていますので、そういうところともコラボしながら、もともとは障害者福祉で始まった農福実践をユニバーサル就労型、農福連携と書きましたが、ちょっと私はそういう構想ができるんじゃないかなというふうに考えています。ユニバーサル就労というのは本当にいろんな世代の方が関わる働き方の在り方ということで、千葉県社会福祉法人で取り組んでいるものが今少しずつ広がってきているところなんです。こういう農福連携の形、就労支援を通してここに挙げられていますような課題にも貢献していけると考えています。最後になりますけれども、今後も北広島市の皆さまから私ども、学ばせていただき、またボールパークとともに発展する学びの場をつくり上げさせていただきたいと思っておりますので、皆さまには今後ともご指導、ご鞭撻を頂ければと思っておりますのでよろしくお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

～質疑応答は割愛～

●閉会の挨拶 藤根 收 星槎道都大学
特任教授・社会福祉学科学科長



社会福祉学科学科長の藤根でございます。北広島市・星槎道都大学連携企画・特別講座の閉会にあたりまして、一言ごあいさつさせていただきます。「ボールパークの街 北広島市の福祉・保育・教育

の未来を展望する」をテーマに、第一部では本学出身の高谷里奈さん、原裕紀さんのお二人から貴重な活動状況報告をいただきました。北広島市にある本学で学び、北広島市を舞台にしながら専門性を発揮されて、福祉、保育に関連した仕事に情熱を持って取り組まれておられるお二人の報告にうれしさを感じたところでございます。また第二部では、本学の西崎先生、吉江先生、畠山先生の3名の先生方にそれぞれ教育、福祉、保育の専門家の立場から北広島市の取り組みの現在そして未来についてお話をいただきました。北海道の中でも、例えば、教育分野でコミュニティ・スクールや小中一貫教育にいち早く取り組んだ実践をはじめとして、各分野で先進的に取り組んでおられる実践がいくつも紹介されていたと思います。また、他の市町村では類を見ない、多様な児童福祉施設の設置など子供を支える環境整備や情報発信の取組、ユニバーサル就労を指向した農福連携の取組など、本学と連携した実践も含めて、常に先進的であり、貴重な実践を積み重ねられている北広島市の魅力について改めて学ばせていただきました。

私も、北広島市教育施策審議会委員としてお世話になっていますが、まさに「夢に向かって前向きにチャレンジし、そして実現していくボールパークのある街」、それが北広島市なのかなと感じたところでございます。

ボールパークが実現しました今、全国から注目度も非常に高い北広島市における高齢者や子ども、障害のある方々への取り組みの在り方は、市民が豊かで元気に輝く街づくりを進める上で非常に重要なポイントになるのではないかなというふうに考えております。そのためにも北広島市の有する魅力的な環境や取り組みと星槎道都大学の有する専門性や各活動が相互に連携協力し合いながら、学びのフィールドを生かして、よりよい取り組みが一つ一つ実現できたらいいなと強く感じた講座でもございました。北広島市での活動報告を頂きました高谷さん、原さん、それからコーディネーターの小早川副学長、専門家の視点からお話

を頂きました西崎先生，吉江先生，畠山先生，本当にありがとうございました。皆さんとともに感謝の気持ちを込めまして今一度拍手をさせていただきたいと思います。終わりになりますが，本会にご参集いただきました皆さま，本会の企画，運営に関わりました北広島市ならびに本学の関係者の皆さまに心から感謝を申し上げまして，北広島市，星槎道都大学連携企画・特別講座の閉会のごあいさつとさせていただきます。本日はありがとうございました。

謝辞

連携講座の開催にあたり，事前準備等では北広島市企画財政部企画課の皆様，また登壇された本学教員及び卒業生，又，当日会場にお越しいただきました教職と社会福祉学部全学生や介護新聞に記事を掲載いただきました記者の方には感謝申し上げます。本当にありがとうございました（地域連携推進センター 所長 上原正希）。

Ballpark Town

—Envisioning the Future of Welfare, Childcare, and Education in Kitahiroshima City—

UEHARA Masaki

Abstract

The second collaboration project between Kitahiroshima City and Seisa Dohto University, along with a special lecture, was held at the Kitahiroshima City Arts and Culture Hall in commemoration of the 45th anniversary of the establishment of the School of Social Welfare.

In the first part, two alumni of the university gave presentations, and in the second part, three faculty members specializing in education, childcare, and welfare from the university spoke, raising issues and discussing the current situation of urban development in the Ballpark area of Kitahiroshima City, Hokkaido.